

# アイドル部短編集

F. ヴィンケル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

テンションで書いたアイドル部SSです。

キャラ崩壊苦手な方はお戻りくださいませ。

# 目次

花京院ちえり観察日記	1
Never Knows Best	5
桜舞い散る、双葉生茂る季節	10
小さな少女と十二色の本	14
いろはVSあずき	16
Star overhead	22

## 花京院ちえり観察日記

花京院ちえり。

彼女は学園の人気者である。

見たものを虜にする綺麗な瞳に、愛くるしい笑顔。

性格もすぐく明るく、とろける様な声で誰にでも気さくに話しかけていく社交性。

更にスタイルはモデル顔負けで、運動神経も抜群。

しかも、あの『花京院』と言う名家の出身だ。

そんな『神』の化身のような彼女には唯一つの欠点がある。

それは、勉強が苦手なところだ。

苦手、と言うか恐らく勉強すれば出来るのだが、本人にそちらの興味が全く無いのだろう。

その唯一の欠点が彼女の人間味を醸し出し、彼女の人気を一層引き出していた。

まるで『神』が愛されるためだけに作った存在。

そんな彼女が他人から嫌われるわけが無い。

羨ましがられる事はあるのだが、『花京院ちえり』と接した人は、彼女を妬む事が無いのだ。

彼女と接した人は、皆彼女との楽しいひと時を過ごす。

それはまるで空想上の存在。

『人』に笑顔をと癒しを与える存在。

『人』に愛された憧れの存在。

しかし、私は知っている。

『神』が愛される為に作ったと言われる存在の彼女。

そして、皆は知らない。

『神』が作ったように魅せている事を。

恐らく彼女の事で皆が『神』から授けたと言われているものはその綺麗な瞳だけであろう。

私は知っている。

彼女が誰にも知られない様にいつも並ならぬ努力をしている事を。

人気者の彼女は、いつも放課後の予定はいっぱいだ。  
だから毎日時間が取れるのは早朝だけ。

彼女は毎日朝早くから、自宅の敷地内で軽く一時間ほど運動をして、発声練習、それから身嗜みの確認、笑顔の練習を行なっている。  
例えば体調を崩していても、必ず日課を行う。

身体が動かなくても無理やり引きずり、声が出なくても口を開き、  
倒れそうな顔をしながら笑顔を作る。

少なくとも、私と出会ってからは一回もその日課が止まったことない。

ずっと『観察』してきたから間違いない。

そうして彼女は他人に神の産物を魅せてきた。

私だけが知っている。

いや、もしかしたら私以外の10人と一部の先生方は知ってるかも知れない。

しかし、他の方よりも私の方が『花京院ちえり』について詳しいと  
自負している。

何故かって？

それは私が一番彼女の事を『観察』しているからである。

しかし、ずっと『彼女』を『観察』してきたが、私にはずっと解らない事がある。

それは私が彼女の観察を初めた理由なのだが、未だに答えが出ない。

それは簡単な疑問で、簡単が故に難しい疑問だ。

彼女は何故、ここまで人に『魅』せようとするのか。

彼女に別に暗い過去があるわけでは無い。

家族仲も悪いわけでもなく、友人関係のトラブルもあつたわけでは無い。

そんな事は既に『洗い』済みだ。

では、何故か。

それが解らない。

私が『花京院ちえり』を『観察』し初めて随分経つが、私は未だに

一ミリの理解が出来ずにいた。

他人に愛されたい？

他人に注目されたい？

他人より優位な立場にいたい？

否、否、否である。

どれもこれも当てはまらない。

どんなに考えても『人』の理解は出来ない。

それはそうだ。

今だに存在が確認されていない生物や、用途がわからない生物の機能等存在する。

それと同じ様に、『人』の心理状況等未知の領域だ。

それに私は心理学者では無く、研究者だ。

いや、この場合は探求者になるのだろうか。

存外本人に聞いたらあっさり答えてくれそうだが、それでは駄目だ。

探求者ならば、自分で答えを見つけなければ面白くない。

だから、これからもしっかりと『観察』続けて行こう。

私の可愛い『耳』と『目』を使って。

――

「……………ふう」

ノートを閉じて、軽く目を閉じて背伸びする。

もうすぐ約束の時間だ。

ノートを鞆にしまうと、私は席を離れて教室を出る。

先に待ち合わせ場所である下駄箱に着くと、置いてある姿見で軽く身嗜みを整える。

「よし。今日も髪の毛はさらさらですー！」

「ピノちゃん！お待たせー！」

私を呼ぶ、コロコロとした可愛らしい声に振り向くと、軽く手を振りながらちえりお姉ちゃんが小走りにこちらに向かって来ました。

「ごめんね、待った？」

「わたくしも今来たところですよ、ちえりお姉ちゃん」

「わあお、ピノちゃん女つたらしい〜」

「皆様がいる場所で失礼な事言わないでくれませんか!？」

少し怒った様に言うと、ちえりお姉ちゃんは悪ガキの様に「にしし」と笑って頭を撫でて来た。

「むう、子供扱いしてえー」

「ごめんごめん、じゃあタピオカのお店行こうか、風紀委員長に見つかる前に」

そう言うと、ちえりお姉ちゃんは私の手を引つ張り校門へと向かう。

私も内心呆れた様な顔を作り、昂る気持ちを表情に出さず付いて行く。

この昂りは恐らくタピオカを飲めるからだろう。

ちえりお姉ちゃんの横顔を『観察』しながら、私達は夕焼けの後門を後にした。

# Never Knows Best

「見渡す限り青一面の空」

空を見上げて、少女はくるりと回る。

「誰も居ない屋上に、学園一の美少女」

透き通る様な銀髪を空中で泳がせながら、彼女は私の前に躍り出る。

「そんな良い女が吸ってる煙草はNever Knows Bestかな？」

「ただの電子タバコ…にゃん」

私のもってつけた様な「にゃん」に、彼女…夜桜たまは私に笑いかけた。

「おかしいわね、学内は全面禁煙の筈よ。花京院ちえりさん？」

恐ろしく整った綺麗な顔立ちに、同性でも胸の鼓動が加速してしまふような優しい笑顔。

そんな「胡散臭い」笑顔を他所見に、私は電子タバコを口から離して煙を吐く。

吐き出した煙はゆらゆらと虚空を登った。

「学園のアイドルのこんな場面見たら、皆んな卒倒するだろうね」

「授業バックれて屋上でサボろうとしてるカリスマ生徒会長様がよく言う」

憎まれ口に憎まれ口を返すと、夜桜たまは私の隣に腰を下ろした。

「あら？私は体調が悪いから少し休んで戻る予定よ？」

「休憩するなら保健室なのではー？」

「保健室でしか休んではいけない、と言う規則はないかなー？」

「屁理屈ばかり言う悪い子はここにゃん」

「あうっ」

軽くチョップすると、たまちゃんは大袈裟なりアクションを取りながら、よよよと私から距離を取った。

「酷い…DVよ…!!」

「驚いた。ちえりはたまちゃんと籍を入れた覚えはないが」



「結婚しよう」

「まだ、引退するつもりはないにゃん」

笑顔で即答すると、たまちゃんはキリツとした表情から打って変わって絶望した表情に変わる。

そのギャップに耐えきれず、私は思わず吹き出してしまった。

「にゃ、にゃはっ…たまちゃんそれはずるいにゃ…くくっ…」

「ちえりちゃんの負けー！いえい！ジュース奢りね」

たまちゃんは悲しそうな顔を崩さずに、器用に嬉しい声を出しながらガッツポーズをとる。

それがまたツボに入り、私はしばらく声を押し殺しながら笑った。

「しかし大丈夫なの？いくら『目』や『耳』がないからって堂々とサボって煙って」

私が大きく深呼吸をして落ち着くと、たまちゃんが首を傾げながら問いかけてきた。

「いちいち仕草が可愛いのが腹立つ」

「たまちゃん…。煙って言い方おっさん臭い」

「うるさい、黙れ」

「怖い怖い。大丈夫だよ。大胆な方が、意外とバレないものよ」

「そう言うものかしら」

半信半疑な顔でそう言うと、たまちゃんは私から電子タバコを奪い、軽く吸って煙を吐き出す。

「チヨコレートの味がする」

「チヨコレートフレーバーにゃん」

「初めて吸ったけど、煙草って言うより、味付きの煙を食べてる気分」  
「ちえりちゃんは未成年故、煙草はダメにゃん。というかたまちゃん吸ったことあるの？」

「いや、私も吸った事はないけど、雀荘とかでよく吸う匂いはもっと重い感じだから」

「あー」

納得しながら頷く。

文武両道、容姿端麗。教師生徒からも信頼が厚い、我らが生徒会長

が所属しているのは、麻雀部である。

彼女は麻雀が大好きだ。

しかもプロ顔負けの強さ。

しかし、麻雀部は人数不足の閑古鳥状態だった。

まあ、原因はたまちゃん本人のせいなのだが…。

彼女は普段は先ほど述べた通り、完璧超人の優等生だ。

余りにも恐れ多くて、一般の生徒が入部しない、というか近寄ってこない。

だから、大体彼女は部室では無く、普通の麻雀を打つ事が多い。ちなみに私も仮部員だったりする。

あまりに、可愛そうだったので、名前を貸してあげたのだ。

優しいちえりちゃんとかかわいいぞ！

「ところでたまちゃん」

「んー？」

スパSPAと煙で遊びながら、話半分に返事をする彼女。

吸える回数が決まってるのだから余り無駄打ちしないでほしい。

「さっきのねばーなんたらって、煙草の銘柄なんかにゃん？」

「Never Knows Best？」

「そうそれ。ネバーノウズベスト？」

「あー、そんなものかなあ」

記憶力が良い彼女にしては珍しく曖昧な返答に、私は疑問の表情をたまちゃんに向ける。

彼女はこちらを見るわけでもなく、青い空を見上げて、煙を吐いていた。

私も特に何も言わずに空を見上げる。

「ちえりちゃん…。」『人』つてき…、何が正しいか、何が悪いのか。悩んで生きてるよね」

たまちゃんは何気なく、当たり前の言葉を溢す。

恐らく彼女の中ではまだ整理がついてないのだろう。

うまく言葉で表現できない、ぎこちない喋り方であった。

「悩んでさ、悩んで悩んで悩んで出た答え。それが自分にとっての正

しぎで、他人にとつての間違えだった時」

ちらりと隣に目線を向けると、空を見上げながら呟く彼女の声は、少し震えていた。

上手く髪に隠れて、彼女の瞳は見えない。

「ちえりちゃんならどうする？」

空を見ていた彼女の視線と、彼女を見ていた私の視線が交差する。

ゆらゆらと彷徨う、彼女の瞳。

今にも折れそうな、今にも消えてしまいそうな表情。

ちえりには彼女が何に悩んでいるのかは解らない。

私は馬鹿だから、彼女の苦悩を理解する事が出来ない。

だから私は答える。

「そんなもの、知らないにゃん」

「え？」

「それはたまちゃんが悩んで答えを出さなきゃいけない問題だよ。だから、ちえりからは何もアドバイスは出来ないし、答えの提示出来ない」

それは逃げになるから。

私は立ち上がると、惚けた彼女から電子タバコを奪い取る。

最後に一回だけ吸って、大きく吐き出しながら、屋上の出口に向かう。

「ただ、私なら。ちえりなら、ちえりが正しいと思った道を進むよ。たとえ周りに反対されようが、悪だと罵られようが知るか。それが私の選んだ道だ。まあ、ただ…」

一度言葉を止めて振り返ると、たまちゃんは泣き出しそうな顔でこちらを見ていた。

だから私は答<sup>笑って</sup>えてあげ<sup>あげる</sup>る。

「本当に間違っていたら、たまちゃんが、アイドル部のみんなが止めてくれるでしょ？」

だから、たまちゃんも安心して間違えるといいよ。そしたらちえりちゃんが可愛さドバドバで止めてあげ<sup>答</sup>るから」

ちえりの今日一番の、とびき<sup>答</sup>りの笑<sup>え</sup>顔で。

「それじゃ、ごきげんよう。Dear My Friend?」  
たまちゃんは驚いた顔して固まっていたが、私はそれを無視して踵を返すと、ひらひらと手を振りながら、授業終了のチャイムを聞きながら屋上を退出した。

――

「アドバイス…してんじゃん…」

チャイムの音を聞き流しながら、彼女が出て行った扉を見つめる。

「そっか…簡単な事だったよね…」

静かに目を閉じる。

視界を閉じても瞼に焼き付いた、最後に見せてくれた、彼女が私にだけ魅せてくれた”とびきりの笑顔”。

(何を怖がっていたのだろうか)

例え私が全ての『人』から嫌われてしまっても、少なくとも”彼女達”は私のそばにいてくれるだろう。

(ならば、答えは決まっている)

例え私がどんな失敗をしても、彼女…私の素敵な友人花京院ちえりは私を救ってくれるだろう。

そしてきつと馬鹿だなあと笑い話にしてくれる。

私は再び空を見上げる。

青空は心なしか、先ほどよりも綺麗に見えた。

## 桜舞い散る、双葉生茂る季節

カチツ、カチツ

見慣れた扉を開くと、外とは逆に闇が落ちる。

カチツ、カチツ

整理されるように物が散乱する地面。

私は散乱するものを避けながら、暗闇の中の唯一の光源に向かってゆく。

カチツ、カチツ

気をつけながら少し進むと、目的のものが見えた。

そこに居るのはここの主。

カチツ、カチツ

私の大切な人。

カチツ

「それ、ロン」

カタカタと手慣れた速度で対戦相手にお礼を打つと、彼女はこちらを振り返る。

「ふーさん、いらっしやい」

先程までの真剣な顔とは打って変わって、気の抜けた様ににへらと笑う彼女。

親しい人にか見せない、人間離れた綺麗な顔を、これでもかというくらいに駄目にした愛おしい笑顔。

私の大好きな、無防備な表情。

私はそんな彼女の、嬉しそうな笑顔に笑顔で返す。

「たまちゃん、また部屋汚くなってんだけど、なんなん？ふーちゃんが先週綺麗にしたばかりだよね？」

「あ、いや、その」

「しかも、毎回毎回ちゃんとご飯食べてって言うてるのに、またゼリーとかスナックバーで済ませたでしょ？」

「あの、その」

「しかも麻雀好きなのはわかるけど、ちゃんと睡眠と休憩は取る様に

とも言ったよね?」

「…言いました」

「で、昨日は何時に寝たの?」

「……」

いつの間にか正座して黙り込む彼女。

目は水を得た魚の様に泳ぎ回り、全くこちらと瞳を合わせない。

「…たまちゃん?」

「申し訳ありませんでした」

私が笑顔で問いかけると、たまちゃんは潔く土下座をした。

「……」

「とりあえず、たまちゃんは少し寝て。その間にふーちゃんが片付けるから」

「ふーさん好きい」

かれこれ10分ぐらい黙って罰を与えていたが、そろそろ良いかと声をかけた瞬間、彼女は勢いよく腰に飛びついてきた。

「もー、たまちゃん。掃除出来ないから」

「んー」

「ほら、ご飯の支度もさっさとしないといけないから」

「んー」

「…なんかあったん?」

「……」

彼女は私のお腹の辺りに顔を埋めたまま、私の問いに無言で返す。

ただ、彼女の手にしし力が入ったのが返答になっていた。

私はそんな彼女の頭に手を置くと、彼女の回す腕に更に力が籠る。

「たまちゃん。ふーちゃんが膝枕してあげるから、とりあえずベッドで寝よう」

「…うん」

私の提案に彼女は少し時間を掛けて離れる。

そんな彼女の手を握るとベットまで連れて行く。

手を離し、私がベッドに座ると彼女は再び腰に抱きついてきた。

これじゃあ膝枕じゃなくて、抱き枕じゃん。

暫く彼女の頭を撫でた後、私は話を切り出した。

「で、何があったん？」

「……………」

彼女は無言だが、なんとなく察しはついた。

「もしかして、またピノちゃんと喧嘩したの？」

「……………うん」

私はそつとため息をつく。

カルロ・ピノちゃん。

私達よりも年下の、大人しくて可愛い女の子。

普段はたまちゃんとピノちゃんは仲が良い。

ピノちゃんはたまちゃんの事を尊敬していて、勉強を教えてほしいと来るほどだ。

しかし、ある一点において彼女は異質を放っていた。

彼女、ピノちゃんは花京院ちえりちゃんにもものすごい執着を持っていた。

何故かは解らないが、何となくは理解はできた。

それは一重に「人」であり、中でも特別な存在であるからだろう。

そんなピノちゃんがご執心なちえりちゃんと、たまちゃんは、実を言うとかかなり仲が良いのだ。

お互いがお互い、何の隔たりもない「素」で接することが出来る存在。

数少ない「本当の」ちえりちゃんを知る存在。

そんなの嫉妬するに決まっている。

しかし、ピノちゃんはその感情を理解できずにたまちゃんに当たってしまい、たまちゃんはたまちゃんですら真つ直ぐに物を言う物だから、ちよつとした口論になるのだ。

と言うことは、恐らく向こうも今頃へこんでいるだろう。

まあ、あちらは恐らくいろはちゃんあたりがフォローしているだろう。

「もう、いい加減わかりなよー。年下なんだから引いてあげないと」

「…だってピノちゃん、私とお話してるのにちえりちゃんの事ばかり」

「恋する乙女か」

「いたい」

私がビシツと頭をチョップすると、さらにぐりぐりと頭を擦り付けてくる。

どうやら元気が出てきたみたいだ。

「ふーさん」

「なにー？」

「大好き」

「私も好きだよ？」

「本当に？」

「本当にー」

「…結こ「やだー」……………」

あ、力弱まった。本当に身内に対しては豆腐メンタルだな。

「ん？たまちゃん」

うつ伏せだから表情が見えなかったが、どうやら寝てしまっていた様だ。

規則の正しい寝息が聞こえる。

私がそつと頭を撫でてあげると、気持ちよさそうに彼女腕に力が入る。

「…ふー…さん…いじわ…る」

「はいはい。ふたばはいじわるですよー」

彼女の寝言に少し笑いながら返す。

知ってる？たまちゃん？

ふたばだって、嫉妬するんだよ？

だから、鈍感なたまちゃんとは結婚はしてあげない。

でも、ずつとずつと、いつまでも一緒にいてあげる。

大好きだよ、たまちゃん。



## 小さな少女と十二色の本

深い、深い、深い、森の中。

純粹で純麗で純潔な、純白に包まれた森の中。

取り残されたのか、忘れ去られたのか、はたまた守られているのか。白銀の世界の中に、一軒のお家がありました。

決して大きくもなく、されど小さくもない。

まるで美しい廃墟の様な、聖堂に似たお家です。

そこには、一人の少女が住んでいました。

とても小さく、可愛らしい女の子。

お外を染め上げる純白に劣らない白いお洋服に、銀糸のように透き通る踝まで伸びる長髪。

そんな彼女の趣味は読書でした。

絵本、小説、戯曲になんでもござれ。

壁一面には本棚が敷き詰められ、様々な本が、すべての指を折り曲げて数えても、足りない程並んでいます。

彼女自身も、自ら執筆し、描き、時には小さな、時には壮大な世界を創りした。

そんな少女が今ご執心なのは、十二色のお話です。

時には喜劇、時には歌劇、時には話劇。

千変万化な素敵で、可憐で、華麗な、常にページが増え続ける魔法の絵本。

小さな冒険者はその十二譚に、泣いたり、笑ったり、驚いたりと百面相をしながら、毎日毎日読んでいました。

「いずれ私も、こんな物語を紡ぎたいな、ひつじさん」

少女から漏れた夢に、彼女の近くに浮いているふわふわした毛玉の様なモノが、ふわりふわりと小さく揺れました。

その毛玉は彼女から離れると、本棚の中にある一つの本の前で止まりました。

不思議に思った彼女は、こてんと首を傾げて、座っていた椅子から降り、とてととひつじさんの元へ向かいます。

そこには、彼女の知らない本が一冊挿さっていました。初めて見るのに、まるで最初からそこに存在した感覚。

少女は驚きました。

偶に、少女に本を届けてくれる、密かに憧れているシスターは、勝手に新しい本を置いて帰ったりはしません。

少女が不在でも、帰宅するまで待つていてくれで、必ず手渡ししてくます。

ならば、この本は何でしょう。

好奇心旺盛な少女は、嬉々としてその本を手に取りました。

一体どんな物語が、一体どんな素敵な物を書いてあるのだろう!!

そう思いながら表紙を見ると、そこにはタイトルはなく、お馬さんとイルカさんの可愛い絵がありました。

興奮を隠せない女の子は、しかし落ち着きながら、ゆつくりと本を開きます。

そして彼女は、大きなエメラルドの様な目がポロリと落ちてしまうのではないかと、心配になるくらい驚きました。

そこにあるのは、ただ一文。

― 親愛なるメリーミルクさん。ようこそ、私達の世界へ。 ―

いろはVSあずき

「かしくみかしくみかしくみもーす!!」

いろはが叫びながら勢いよく手を合わせると、彼女の身体が薄い光に包まれる。

【神様の言う通り】

彼女の能力は名前通り、本人さえ「何が出るかわからない」完全にランダム仕様。

まさしく彼女が好きそうな能力だ。

かなり使い勝手が悪い力だが、当たれば無類の強さを発揮する。

「お？これは？」

あずきは注意深く観察する。

いろはの能力は確かに使い勝手は悪いが、ランダムが故に対策が取れない。

初見で対応しなければならぬのに、初見殺しもあるのだ。

しかも、彼女の様子的に恐らく「当たり」を引いた。

あずきは内心舌打ちをする。

「いつくよー!!あずきちい!!」

いろははその場で元気よく腕を振り回す。

その様子を平然を装いながらあずきは頷く。

「はい、いつでもどうぞ」

「それじゃあー」

ぶんぶんと回していた手を止め、ギリギリと背後に腕を絞りながら腕を上げる。

まるで野球のアンダースローの投げる前のような格好だ。

刹那、あずきの脳内に警報が鳴り響く。

即座に自分の脳天気さに後悔すると同時に、いろはが咆哮と共に勢いよく腕を振り上げた。

「つとべえ!!」

瞬間、あずきの華奢な身体は地面に叩きつけられた。

――

【怪力乱神】

いろはが今回引いた能力は大当たりであった。

“彼女自身理解できていない、理解できない能力”

今も拳を振り上げたのに対して、あずきは地面に“叩きつけられた”のだ。

―理解不能―

故に、防御も回避も、はたまた反撃さえも許さない。

恐らく今まで引いてきた中では一番“当たり”の能力だ。しかし、しかしだ。

金剛いろは外面笑顔を出しながら、内面では高揚を抑えて、冷静に思考する。

相手はあの“木曾あずき”だ。

この程度で終わる訳がない。

“木曾あずき”がこの程度で倒れるわけがない。

いろはあずきに攻撃が入った瞬間に、既に次の行動に移っていた。あずきに注意を払いながら、姿勢を正すと合掌をし、静かに目を瞑る。

「毘沙門天」

いろはの透き通るような声響く。

発声と共に右手を出すと、突如虚空から巨大な槍を持つ手が現れ、現れたのは槍に、炎が纏わり付き、倒れたあずきを串刺しにする。

本来は“炎”は出現しない。

恐らくは、能力の影響だろう。

「十一面観音」

続け様に、一步踏み出し軽く腕を払う。

今度は水で出来た平手が上空からあずきを押し潰し、発動した――の能力が身体ごと、周り一帯を切り裂く。

「如意輪観音」

流れる様に、両手を広げる。

すると、水で出来たら手は霧散し、鋼の様な四本の腕が現れる。

四本の腕は、まるで虫を潰すかの如く、あずきを交互に叩き潰し、最後に二本の腕が現れて、彼女の身体を宙に掬い上げる。

「不動明王」

いろはが地から天へと突き上げるように右手を振り上げると、無防備に空中に挙げられたあずきの身体を、紅蓮に輝く俱利伽羅剣が一閃。

遅れて、灼熱の轟音を上げて彼女を包み込む。

「愛染明王」

天女の如く、いろはがくると一回転する。

灼熱の炎を中心に蓮の華が開き、炎と共にあずきを包見込み、眩く光を放つ。

「聖観音」

また一步踏み出す。

同時に蓮の華の上に巨大な仏の足が出現し、彼女を華ごと地面へと踏みつけた。

「阿弥陀如来」

法界定印の形で鳩尾の前で合わせる。

踏みつけられ地面から浄化の光の柱が、雲を割り、天へと昇る。

「弥勒菩薩」

右手を思惟手の形しに、左手を下に向け、手の平を前に向けると、いろはの身体を神々しい光が包み、後光を放ち始める。

その姿は、まさに仏の化身。

否、金剛いろは「神仏」へと昇華した。

「文殊菩薩」

彼女の頭で結んでいた、「護符で作った」2つ結びのリボンが解け、黄金の髪が宙を舞う。

静かに左足を半歩だす。

半身の姿勢で両手を上に挙げると、光が集約して、「敵」を穿つ剣

となる。

「諸行無常——参る」

開眼した瞳は、穢れを赦さぬ黄金。

言葉と共に大きく右脚を踏み込みながら、光の剣と柱が激突する。

瞬間

閃光

虚無

世界は浄化する

浄土の空間

黄金に輝くは1人の巫女

永遠にも続く一瞬

「南無阿弥陀仏」

黄金の鐘の音に、世界は動き出す。

世界に色が、音が、感覚が戻る。

静かに合掌し、〃神〃は〃少女〃へと戻っていた。

——

「はぁ…」

深く、深く溜め息を吐き、いろははボリボリと頭をかきながら瞳を開く。

元に戻った、エメラルドの様な黄緑の瞳を濁しながら、顔を歪めて正面を見据える。

「あー……」

予想はしていた。だからこそ、最大の火力で、最高の状態で放った奥義。

そこに【神<sup>ガ</sup>様の言<sup>チャ</sup>う通<sup>ガ</sup>り】の【怪力乱神】の効果も合わさり、常人どころか恐らく神すらも殺すだけの禁忌。

「いやまあ、わかってたけどー」

そこに佇むは、紫の少女。

「あずきちさー」

最初に対面した時と「同じ姿」でこちらを見る、紫の少女。

「無傷って…あんた…」

いろはの投げやり言葉に、紫の少女は表情を変えず、軽く両手を肩の高さに上げて応える。

少女どころか、いろはが穿ち、無に返した空間すらも「元に戻っている」。

【オールドファッション大嘘つき】。申し訳ないです。痛いのは嫌なので無かったことにしました」

そう呟くと、あずきの足元に人の頭のサイズはあろう、特大のネジが出現した。

あずきはその上に器用に乗ると、両手を広げてバランスを取る。

すると、どう言うことかネジが回転を始め、その上に乗ってるあずきも両手を広げたままゆっくりと回転を始めた。

「わー!!卑怯だチートだインチキだああ!!」

「いや、金剛さんこそ神社のくせに仏の力って…」

「いーじゃん!!お寺も神社も似たようなものでしょ!?!」

「いや駄目ですよ。そんなので何故仏様の力使えるんですか」

「カツコいいから頑張ったら出来たー」

「…あなたの方がよっぽどチートですよ」

くるくる回りながら、呆れた顔をするあずきに、いろはは訳がわからないと顔を傾げた。

「あーあ、結局詰まるところも、詰まるところ」

「…!?!」

いろはが言おうとする言葉を瞬時に理解して、あずきにとっては珍しく慌てて止めようとする。

しかし、一足早くいろはは言葉を紡いでしまう。

「また勝てなかった」

「……………あう」

台詞をとられたあずきは、ネジで回転しながら器用に落ち込む。

そんなあずきの心情など露知らず、いろははそろりそろりと近寄ると、「隙ありっ」とあずきを抱きかかえた。

「お腹減ったからラーメン行こうぜえ!!あずきちい!!」

「あれ程の力を使ってお腹減ったで済むのは羨ましいです。普通半年は動けないですよ。いろはさんの奢りですね」

「えーなんでき!?!」

「自分の胸に聞いてください」

「えーわかんないっ、あずきちに勝てねーくそー」

そう言いながらも全く気にしてなさそうな笑顔で、あずきを下ろして、「早く、早くー!!」と元氣よく手を引っ張るいろは。

紫の少女はため息を吐きながら、そつと聞こえない様に呟く。

「私も勝てませんよ…いろはさんには」

自然に引っ張られている手を、ほんの少しだけ握り返すのだった。

前を向く少女に、見えない様に微笑みながら。



## Star overhead

灰色の病室。

灰色の街並み。

灰色の空。

ここから見渡す景色に色はなく、ここから見渡す世界はどうしよもなく一人ぼっちであった。

いつものベンチに腰をかけ、先程自動販売機で買ったパックの飲み物にストローを刺して口につける。

「うん、美味しい」

甘い、しかしそれでいてさっぱりとした優しい味が、口の中に広がった。

じわじわと身体の中に染み渡る感覚を、静かに目を瞑って感じる。

(考え事をする時にはこれに限るな)

あれから、いったい何回答のない回答を自問自答したであろうか。

意味のない問答を繰り返したであろうか。

最初は、最初はそう、憧れであった。

暗い、暗い夜空に浮かぶ数少ない星達。

その星の一つ。

白く輝く綺麗な「星」に憧れた。

いつか自分も彼処に行きたい。輝く星達の一つになりたいと。

がむしやらに手を伸ばし、もともと強くない身体に必死に必死に鞭を打ち、走り続けた。

転んで立ち上がり、足が動かなくなれば腕で立ち上がり、腕が動かなくなっても這いずりながらも前に進んだ。

そして彼女は一つの「星」になれた。

とても眩しく輝く「星」と一緒に夜空に上がり事ができた。

しかも、それだけではない。

自分の周りには、一緒に夜空に登った「星」

達もいた。

自分とは違う、光り輝く『星』達が嬉しかった。

凄く、凄く嬉しかった。

憧れの舞台に、自分が立てた事が。

憧れの舞台に、仲間がいた事が。

その幸福に喜び、歓び、悦び――

そして、私の身体は壊れ始めた。

――

元々、『昔』と違い、『今』の身体は丈夫な方ではなかった。

弱く、脆く、懦弱。

そんな身体なのに、鞭を打ち、悲鳴に耳を塞ぎ、進み続けた。

その結果見事に夜空に咲き誇った彼女は、同時に少しずつ光を失い始めた。

それでも、周りの『星』達に心配かけない様に、必死に輝こうとした。

しかし、彼女の努力は虚しく、あっさりとその虚構は見破られた。

いや、恐らく彼女は『最初』から気づいていたのだろう。

それでも、何も言わずに、崩れる直前に私に手を差し伸べてきた。

1人きりの空間に、錆び付いた音が聞こえる。

ゆっくりと目を開けると、ドアから1人の少女が顔を出す。

「やはりここにいましたか」

紫色の少女はてくてくとこちらに歩んでくると、私の正面にピタリと立ち止まる。

下から見上げる顔には表情は無い。

表情は無いが、私には解る。

これは、私を心配している顔だ。

「多少は暖かくなってきましたが、お身体に悪いですよ」

「いやあ、どうしても部屋だと気が滅入ってねえ」

私の言葉に、紫の少女は表情を変えないまま器用にため息をつく  
と、「失礼します」と私の隣に腰をかけた。

「まあ、気持ちわかりますが。あまり長時間いるのはダメですよ」

「お、付き合ってくれるの？」

「いた方が罪悪感を感じて早く戻ると思いました」  
「うえー」

いつも通りの軽口を叩いて、膨れっ面をしながらも私は彼女に感謝する。

いつも通り：本当に「いつも通り」。

彼女はあの日から毎日、私のところに来てくれている。

偶に他の子達も来てくれているが、彼女達も忙しく、流石に毎日来る事は無い。

しかし、この紫の少女だけは毎日私の元へと来てくれていた。

誰よりも早く私の異変に気づき、私に別の輝き方を教えてくれた少女。

毎日私のところに来ては、学園であつたたわいな話や、他の子達の活動の話を聞かせてくれる。

灰色の世界にいる私に、毎日紫を届けてくれる少女。

彼女は私と違い、「輝く」事が出来るのに。

消えかけている私の為に寄り添ってくれる。

そんな彼女に、私はどうしよもなく甘えていた。

押し潰されそうな罪悪感に包まれながらも。

「そろそろ、戻りますよ」

「…うん、そうだね」

立ち上がる彼女に、私は微笑みながら立ち上がる。

しかし、彼女は立ち上がった私を見上げたまま、動こうとしない。

紫水晶の様に綺麗な瞳が、私の瞳を捉えたまま、離さない。

まるでメデューサの瞳を覗いてしまった愚かな獲物の様に、私は動けなくなる。

「牛卷さん」

唐突に名前を呼ばれて、永遠とも続くと思った時間が、ふと終わりを告げる。

「なに？あずきち」

どうにか私は冷静を装いながらも、内心の鼓動を隠しながら返事を

する。

「私は、あずきは貴女を理由に逃げています」

「え?」

唐突な彼女の発言に私は意味がわからずに驚くが、彼女はお構いなしに言葉を紡ぐ。

「あずきはもともと、光り輝く様な存在ではなかった。そんなあずきに、ばあちやるさんが『星』にならないかと、お声をかけてくださいました」

私は何も言わずに、彼女の言葉に耳を傾ける。

「それは私が想像しているよりも、とても…とても、眩しすぎて…あずきは逃げ出してしまいました。あずきなんか…私なんか、沢山の人々が期待を、夢を抱いて下さいました。しかし——」

「——私は逃げ出しました」

ふと言葉が途切れる。

彼女と私のは途切れない。

「今から戻るの怖いです。とても、とても。私一人では、私一人だけでは、空に帰る事が出来ません」

彼女の紫が深く、深くなる。

「だから——牛卷さんの身体が良くなったら、あずきと一緒に空へ昇ってもらえませんか?」

言葉と共に、紫の少女は右手を差し出してきた。

ああ——そうか——彼女も——

小さな少女が差し出した、微かに震える手を、私は優しく握る。

「あずきちは悪女だね。私があずきちのお願いを断れるとでも?」  
彼女の瞳に安堵の色が浮かぶ。

「知ってますか? 悪女はもれなく良い女なのですよ?」

「知ってるよ。絶賛体感中」

そう返すと、彼女にしては珍しく、私の手を引きながら、扉へと向かう。

「さあ、戻りますよ。りこさん」

「さあ、戻ろうか。あずき」

悪戯する子供の様な笑顔を浮かべる彼女に、私はとっておきの笑顔を返しながら、病院の屋上を後にするのだった。  
みんなで輝く星空を思い浮かべながら――